

### 3

## 越冬ミカンへの取り組みを支援

### ■ 高松市西部地域ミカン部会 ■

(東讃農業改良普及センター 川原清剛)

#### ●対象の概要

高松市西部地域は、ハウスミカン発祥の地であるとともに、「蔵出し本貯蔵ミカン」としてブランド化した長期貯蔵産地の地位を築いてきた。

また、県内で育成された「小原紅早生」や「川原」を、全国的な価格情勢に左右されにくい個性化ブランドとして導入・高品質化に取り組んでいる(ミカン部会員数320名、栽培面積は120ha程度)。

#### ●課題を取り上げた理由

昭和45年に全国に先駆けて栽培が始まったハウスミカンは地域内へ急速に広まり、高品質と早期出荷の産地として全国に知られていた。しかし、近年は重油価格の高騰による収益性の低下から栽培を中止するハウスが増加し、施設の有効活用と農家の収益確保が経営上の大きな課題となった。

そこで、収穫時期を通常の11月から翌年2月まで遅らせて、完熟果実を収穫する「越冬ミカン」への取り組みが始まった。「越冬ミカン」は、2年に1度しか結実・収穫できないが、結実年には10月に既存ハウスの天井部のみにビニールを被覆することで容易に取り組めることから、実施する農家は増加した。そして、軌道に乗り始めてからはハウスの新設や連年安定生産技術への支援が求められていた。

#### ●普及活動の経過

##### 1 越冬ミカン推進に関するアンケートの実施

取り組みの拡大に向けて農家の意向に沿った普及活動を展開するため、部会員150名に対して、導入する場合の条件等の意向調査を実施した。

##### 2 既存ハウスの補強に向けた支援

ハウスの長期利用や突風等による自然災害の軽減を図るため、香川大学及び農業試験場が開発したダブルアーチ、クロス、おもり補強などの技術を、農家への理解促進と普及を図るた

め、関係機関と協力して講習会を開催するとともに、8箇所の展示ほを設置した。

##### 3 新設ハウスの推進

ハウスミカンからの転換園では、既に栽培されていた早生品種(小原紅早生、宮川早生等)をそのまま利用しているが、市場から普通品種(青島、大津4号)への取り組み要望があったことや販売単価が好調であったことから、ハウスの新設を希望する農家も見られていた。

このことから、県単事業等を活用したハウスの新設を講習会等で推進するとともに、個別の相談・指導を行った。

##### 4 果実品質の高位平準化を目指した指導

越冬ミカンは、出荷時の果実品質が糖度12.5度以上、クエン酸1.00%以下のため、JA香川県と協力して7月から収穫期までの1ヶ月毎に果実品質の調査を行い、今後の栽培管理への対応について指導を行った。

##### 5 連年安定生産技術の普及

通常より収穫期を遅らせる越冬ミカンでは、樹体へのストレスが大きいことから翌年の着花(果)量が著しく少なくなる。このことから、隔年交互結実法(結実年と遊休年を人為的に交互に管理する)が一般的行われているが、後期重点摘果により連年結実させた場合の所得を試算するとともに、摘果方法の理解を図るための講習会を開催、個別巡回指導を行った。



越冬ミカンの販売荷姿

## ●普及活動の成果

1 アンケートの結果から、既存ハウスの補強を行う場合の設備投資額は、多くが10 a 当たり50万円以内を上限と考えていることが分かった。また、「ハウスを新設してもよい」と考える農家が11.3%いることが明らかとなり、「連年結実させたい」との意向が30%を越えていることも分かった。

この結果は、農家が導入しやすいハウスの補強方法、新設ハウスの推進、連年安定生産技術の普及に活用していった。

2 風当たりの強い場所にハウスを所有する農家を中心に補強技術の関心は高く、講習会では多くの質問が寄せられ、回答・個別指導により理解の向上が図れた。

展示ほを設置した農家では、作業労力やハウス強度の向上性の確認が図れた。また、「補強資材を設置する労力・資金面への支援」、「従来設置しているハウスでコストを下げられる可能性を検討してほしい」等の要望も寄せられ、今後の検討課題が見つかった。



ダブルアーチ補強

3 平成21年度より県単事業を活用して越冬ミカン栽培用ハウスの新設が行われており、平成25年度までに農家9戸、11箇所、約90 a が新たに加わった。

表-1 越冬ミカン用ハウスの新設

	農家数	箇所数	面積 (㎡)
平成21年	1	2	857
22年	3	3	2,686
23年	1	1	1,381
24年	3	3	2,600
25年	1	2	1,500
計	9	11	9,024

4 7月から各園地の平均的な果実をサンプリングし、低糖度や減酸のペースが早い傾向が認められた場合は、マルチ被覆やかん水・摘果方法をFAXにて指示するとともに、個別指導を実施した。近年は取組農家のほぼ全員が基準値をクリアしており、平成24年産実績は農家18戸、出荷量75 tと過去最高となった。また、販売単価も露地ミカンに比べて2.2倍程度となっている。

5 農家の連年結実に対する要望は高く、試算により所得が多くなることも見込まれた。このため、講習会において後期重点摘果の技術指導を行い、理解の促進は図れたが、摘果作業が9月下旬に集中する等の理由により実施農家はまだまだ少ない。

## ●今後の普及活動の課題

今後の越冬ミカン栽培の拡大を図るためには、新設ハウスの増加がポイントになると思われる。しかし、建設費用は㎡当たり4,600円程度必要で、補助事業等を活用しても農家負担が高いことがネックとなっている。

このため、現地では資材費用を押さえ、自ら施工が可能な越冬ミカン用ハウスの検討が行われ始めている。関係機関と連携し、このハウスの強度を把握するとともに、低コストハウスの利用を図っていきたい。



検討される低コストハウス

また、ハウスの強度診断・補強、連年結実技術については、農家の理解も深まってきているが、マニュアル等を利用して、より農家の経営安定を図っていきたい。